

「日常の三輪空寂」

本山出版室長 蔵重宏昭

今年も恒例のご本山の寒行托鉢が、一月十一日から月末三十一日まで、午後の時間帯でおこなわれました。季節の風物詩として鶴見のまちの皆様にすっかりおなじみになっていることを、実際に托鉢に随行して肌で感じるどころです。

托鉢は、行う者も喜捨する者も「いかに余計な執着を捨て去るか」が大切な眼目である布施の修行なのです。その最良のすがたは「三輪空寂」です。

三輪空寂とは三者の間において何ら執着のないこと、つまり、施す者も恩着せがましくなく、施しを受ける者も選り好みすることなく、施す物に対して物惜しみすることなく、それぞれに思惑を取り払った施しのことです。

托鉢の際当然出会う人は初めての方ですので、まず居ずまいを正す一方、いかにも「修行中」とばかりに厳しい表情を向けるのではなく会う人会う人に穏やかな「和顔」で丁寧に接するよう心がけています。

その成果なのか、今ではやんちゃな小学生の男の子たちが托鉢の列の後ろから托鉢の真似をしてついてきたり、おませな小学生の女の子たちが托鉢僧を取り囲んだり、若い店員さんが店内から駆けつけて飛び出し喜捨した途端急いで職場に戻ったり、と街行く私たちと街の人たちの間に隔たりがない場面にしばしば遭遇することが出来ます。

そうした人たちの共通しているところは、はつらつとしたお顔、嬉しそうなお顔、温和なお顔、などやはり「和顔」で返して下さることです。

行う人、受ける人、そして受け取るものが金品でなく「きちんとした居ずまい」や「和顔」であっても、「三輪空寂」のすがたはあらわれます。

実は普段の日常においてもそのすがたは知らず知らずのうちあらわれています。

親と子・兄弟・友達同士・信頼すべき仕事仲間・親しいご近所同士などなど様ざまに行う側・受ける側があり、そしてその二者に介在するもの、例えば「居ずまい」や「和顔」などがあり、余計な執着を捨て去った授受は親密な間柄なら自然に為されます。

托鉢のように、「三輪空寂」を自分の身近に留めるだけでなくいかに広くあらわしていくか、共にご修行してまいりましょう。（終）